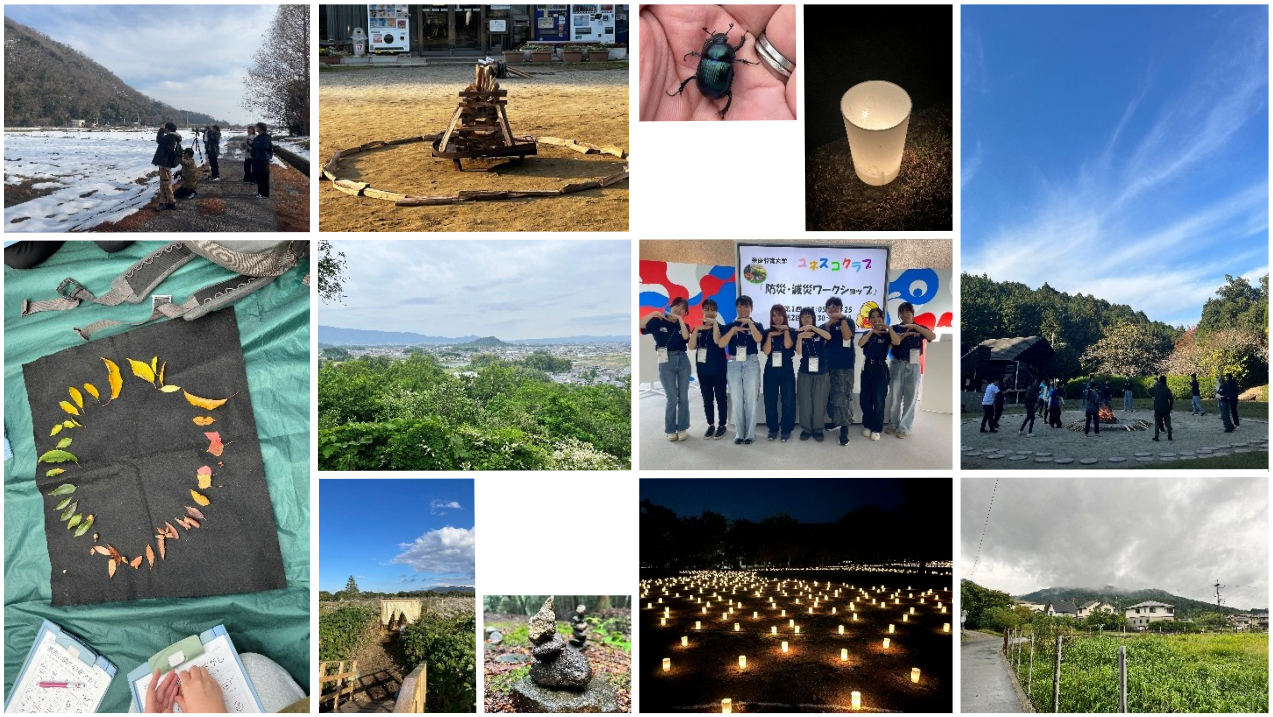
令和７年度
奈良教育大学　ESD ティーチャープログラム
学生活動報告書



2026 年３月

奈良教育大学　ESD･SDGs センター

もくじ

はじめに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

2025 年度 学生 ESD 活動一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

ESD ティーチャープログラム　ESD 実践
- 野外活動支援 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
- 東大寺寺子屋支援 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
- 『ハチ宿アート展』 運営支援 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
- 『子どもおん祭り』 運営支援 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
- 『あつまれ ECO キッズ！』 運営支援・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10

ESD ティーチャープログラム　ESD 演習
- 春日山原始林・奈良公園フィールドワーク ・・・・・・・・・・・・・・ 12
- 万葉集・明日香村を中心とした授業づくりセミナー ・・・・・・・・・ 30
- 『森と水の源流館』 オンラインセミナー ・・・・・・・・・・・・・・ 22
- 『近畿 ESD コンソーシアム成果発表会・実践交流会』 ESD 子どもフォーラム運営支援 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22

奈良 ESD 連続セミナー ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25

あとがき ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39

はじめに

奈良教育大学 ESD・SDGs センター ユース担当
河野晋也

私は以前、奈良県内で小学校教員をしていました。当時から奈良教育大学の学生さんが活発に活動する様子を拝見しており、もう 10 年以上も前のことですが、一緒に春日山を歩いたり、ESD セミナーで授業づくりを学んだりしたことを覚えています。大学の授業のみならず、自ら様々な場に足を運び、ESD の学びを深める姿には非常に感心しましたし、「負けていられないな」と多くの刺激をいただきました。今年度、本学に着任してみると、当時と変わらず積極的に ESD の学びを積み重ねている学生が大勢いました。私にとって、とても嬉しく、有り難い再会でした。

奈良教育大学には、この「ESD ティーチャープログラム」のように、皆さんが ESD を学ぶチャンスがたくさんあります。ユネスコクラブも、そうした学びの場の一つです。部員たちと話していると、「大学生だからこそできる学び」が確かにここにあるのだと感じるようになりました。

着任してすぐ、前任の中澤先生から顧問を引き継ぐことになりましたが、当然右も左も分かりません。そこで、前年度と今年度の代表の方に「ユネスコクラブって、何をするところ？」と尋ねてみました。それぞれ別の機会に尋ねたのですが、返ってきた答えは同じでした。「ESD を楽しく追究すること」、そして「自分が ESD を実践できるようになること」。なるほど、これは実に素晴らしいコンセプトです。ユネスコクラブの部員だけでなく、すべての学生に知ってほしい言葉だと思いました。

本来、ESD に取り組むことは、地球規模の深刻な課題と向き合うことを意味します。先行きの見えない暗い話題になりがちで、私たちはその厳しい現実から目を背けてはいけません。しかし、つらい現実を突きつけられ続けるだけでは、子どもたちはどう感じるでしょうか。将来に希望が持てなくなったり、持続可能性を考えること自体が苦痛になったりするかもしれません。

ESD とは、子どもたちが活躍する社会の在り方を考える学びです。「この社会に関わっていきたい」「より良い社会にしたい」と、“前を向けるような学び”が必要ではないかと思います。その点で、将来教員を目指す皆さんが「ESD を学ぶ楽しさ」を追究することは、極めて大きな意義があると思っています。

大学で過ごす時間は、あっという間に過ぎ去ります。社会に出てからも楽しいことは山ほどありますが、せっかくの学生時代です。「今だからこそできる、楽しい ESD」を実践してください。皆さんが「やってみたい」と直感したことに全力で取り組むことこそが、とても価値ある学びにつながると信じています。

私たちの社会を考える ESD の種は、身の回りの至る所に転がっています。そしてそれは、必ず身近な場所から世界へとつながっていきます。ぜひ次年度も、ESD を「楽しく」追究し続けていってください。私も、皆さんからたくさんのことを学ばせてもらうつもりでいます。きっと、皆さんの姿を見て、改めて「負けていられないな」と思うことでしょう。

共に切磋琢磨していけますように。

2025年度 ESD 活動一覧

月	活動内容	開催場所
4月	・ 第 1 回 春日山原始林・奈良公園 FW（27 日）【ESD 演習】	春日山遊歩道北部～若草山
5月	・ コロキウム講座支援（奈良女子高校、奈良女子大学附属中等教育学校 14、21 日）	奈良教育大学
	・ 第 1 回 万葉集・明日香村を中心とした授業づくりセミナー（24 日）【ESD 演習】	明日香村
	・ 野外活動支援（13 日 平城小、21 日 左京小、22 日 あやめ池小）【ESD 実践】	奈良市野外活動支援センターなど
6月	・ 城陽環境パートナーシップ会議共同プログラム（城陽市、12 日～）	城陽市内
	・ 第 2 回 春日山原始林・奈良公園 FW（21 日）【ESD 演習】	春日山遊歩道北部
	・ 金沢大学・富山大学 共同教員養成課程 授業『SDGs 教育実践演習Ⅱ』ゲストティーチャー（25 日）	オンライン
	・ 野外活動支援（4 西大寺北小、11 三碓小、24 東登美ケ丘小、25 済美小）【ESD 実践】	奈良市野外活動支援センターなど
7月	・ 野外活動支援（7 日 一条中）【ESD 実践】	奈良市野外活動支援センターなど
	・ 第 3 回 春日山原始林・奈良公園 FW（12 日）【ESD 演習】	春日山遊歩道南部
	・ 第 1 回 森と水の源流館授業づくりセミナー（12 日）【ESD 演習】	オンライン
	・ 第 2 回 森と水の源流館授業づくりセミナー（19 日）【ESD 演習】	オンライン
	・ 第 2 回 万葉集・明日香村を中心とした授業づくりセミナー（19 日）【ESD 演習】	万葉文化館
8月	・ 第 3 回森と水の源流館授業づくりセミナー（2 日）【ESD 演習】	オンライン
	・ コトクリエ探究キャンプ支援（大和ハウス 7-8 日）	大和ハウスコトクリエ
	・ 第 4 回 春日山原始林・奈良公園 FW（9 日）【ESD 演習】	なら燈花会・二月堂周辺散策
	・ 第 4 回 森と水の源流館授業づくりセミナー（30 日）【ESD 演習】	オンライン
9月	・ おぎの美術館 小学校授業支援（奈良女子大学・平城宮跡・伏見小 1 日～）	伏見小学校
	・ EXPO2025 防災・減災ワークショップ（大阪・関西万博・7 日）	EXPO2025 ジュニア SDGs キャンプ
	・ 東大寺寺子屋支援（東大寺 27-28 日）【ESD 実践】	東大寺

	・ 野外活動支援（富雄南小 24 日、都跡小 30 日）【ESD 実践】	奈良市野外活動支援センターなど
10月	・ 高等学校探究授業支援（ESD 活動支援センター、セブンイレブンジャパン、京都先端科学大学附属高校 1 日～） ・ 第 5 回 春日山原始林・奈良公園 FW（4 日）【ESD 演習】	京都先端科学大学附属高校 滝坂の道
11月	・ 第 7 回 春日山原始林・奈良公園 FW（1 日）【ESD 演習】 ・ 『ハチ宿アート展』 運営支援（23 日）【ESD 実践】 ・ 子どもおん祭り（NPO 法人宙塾 29 日）【ESD 実践】	奈良公園・飛火野周辺 奈良教育大学 ならまちセンター
12月	・ 学内避難訓練 支援（奈良教育大学 3 日） ・ あつまれ！ECO キッズ（奈良市・奈良県地球温暖化防止活動推進センター（NASO 6 日）【ESD 実践】	奈良教育大学 ならまちセンター 万葉文化館
1月	・ 近畿 ESD コンソーシアム成果発表会・実践交流会（奈良教育大学 11 日）【ESD 演習】 ・ 防災・減災授業支援（奈良女子高校 16 日～）	奈良教育大学 奈良女子高校
2月	・ いこま くらしのブンカサイ ブース出展（生駒市 1 日） ・ 第 12 回アクサ・ユネスコ協会 減災教育プログラム 減災教育フォーラム登壇（公社ユネスコ協会連盟 7 日） ・ 第 5 回森と水の源流館授業づくりセミナー（7 日）【ESD 演習】 ・ ESD ユースフォーラム（プレイベント）（奈良教育大学 20 日） ・ ESD 国際シンポジウム in NARA（奈良教育大学 21 日） ・ 附属こども園コキアの箒づくり 支援（附属こども園 28 日）	生駒市北コミュニティセンターはばたき オンライン 森と水の源流館 奈良教育大学 奈良教育大学 奈良教育大学附属こども園
3月	・ STEAM フェスタ（奈良女子大学附属中等教育学校 27 日）【ESD 実践】	コトクリエ

※　この一覧には、ESD ティーチャープログラム以外の、学生 ESD 活動も含まれています。

ESD ティーチャープログラム ESD 実践

◇ 野外活動支援

【平城小学校】 2025.5.13

■ 自分で考えたこと

私が今回の野外活動で学んだことは、二つある。一つは生徒の行動である。自分の出した指示、現場の先生の出した指示などを比較して生徒がどのように行動するのか、どのような指示で動くのかについて学ぶことが出来た。特に小学生という普段の大学の活動でもあまり関わらない生徒の姿、授業では見られない生徒の姿について学ぶことが出来た。二つ目は生徒からはどのように見えているのかを知ることの重要性である。例えば、教員からの話し方一つとっても、普段の大学生を相手にするような話し方、口調ではあまり子どもは興味を惹かず、逆に恐怖心を与えてしまう可能性もある。そのことから生徒の目線からどう見えているのかを考察する重要性を学んだ。

加地 優太　　数学教育専修 3 回生

【左京小学校】 2025.5.21 奈良市青少年野外活動センター

■ 自分で考えたこと

私が今回の野外活動支援を通して学んだことは、子どもたちを信じて見守ることの大切さである。野外炊飯の活動時、火がなかなかつかず、どうにか成功させようと私自身が積極的に手伝い、火おこしの補助や声かけを行った。しかし、子どもたちにとって野外活動は自分でやってみる経験そのものに価値がある。大人が先回りして手を出しすぎると、その挑戦の機会を奪ってしまうことに気づいた。うまくいかない時間も含めて大切な学びであり、もっと心に余裕を持って子どもたちの力を信じ、任せて待つ姿勢が必要だったと今回の野外活動支援を通して強く感じた。

安井 優美　　家庭科教育専修 3 回生

■ 自分で考えたこと

今回の夜活では特に、子供に話しかけることの難しさを学んだ。最初は子供に話しかけてもすぐに会話が途切れてしまい、うまく接することができなかった。しかし、こういう感じで話しかけるといいよ、と先輩が教えてくださり、最初に比べると少しだけ子供が心を開いてくれるようになった。まだまだ手一杯で、周りに目を配りきれていなかったので、体調が悪そうな子や、少し輪に入れない子に気づいてあげられるようになりたい。

また、初めてということもあるが火のつけ方など分からないことが多く、燃やすために多く新聞紙を入れてしまった。結果、新聞紙の灰が煙とともに舞い上がり、より目や喉が痛くなった。次はもう少し夜活についての知識をつけてから挑みたい。

宮家 和奏　　幼年教育専修 1 回生

【三碓小学校】 2025.6.11 生駒市山麓公園

■　自分で考えたこと

今回初めてボランティア活動に参加して、子どもの自主性に驚いた。みんなで楽しみながら、互いに教え合い、試行錯誤している姿に感動した。初めのうちは子供との接し方がわからなかった。しかし、先輩方の声かけを見て、こういうふうに子供と接すると良いのだと学ぶことができた。子供達の行動を肯定しながら、提案していくという方法が、ボランティアとして最適解なのではないかと感じた。

また、教育現場において、先生方がどのように子どもたちと接しているのかを目の当たりにすることができ、教師という職業について以前よりも理解が深まった。とても貴重な経験ができたと思う。

子供達にもっと頼ってもらえるように、先生の指示をしっかりと頭に入れたい。そして、積極的に子供達とコミュニケーションをとり、話やすい相手になりたいと感じた。自己紹介では、子どもたちの警戒をといて、親しんでもらえるようなことを言いたいと思った。今回はできなかったが、子供のやっている行動にたいしてもっと声かけをして場を盛り上げたり打ち解けたいと感じた。今後もこのような活動に参加し、様々な気づきをもとに、良い教師になりたいと思った。

岡田 葵　　音楽教育専修１回生

■　自分で考えたこと

野外活動は今回が初めてであったが、児童が自分たちの力で成し遂げようとさまざまな工夫を凝らす様子を多くの場面で見ることができた。たとえば野外炊飯の際には、雨で火が点きにくい状況を考え、細かな木片を集め、それを自分たちの班のみで使用するだけでなく他の班にも共有していた。また、いくつか役割りを分けることで効率よく作業を行うとともにそれぞれが役割に責任を持ちながら行動する姿を見ることができた。

今回の野外活動支援で看取できたのは、上記のようなそれぞれが集団における役割意識と責任を自覚して行動する児童の姿である。炊飯で使用した器具の片付けや掃除を徹底して行う姿、布団の敷き方が分からなければ部屋長が率先して敷き方を確認し、それを全体に伝えて回る姿、スタンツにおいて学年の代表となり指揮を執る姿など、子どもたちはそれぞれの場面で力強くいきいきと活動していた。それぞれの役割と責任を持つ個々の活躍が大きな推進力を生み出し、学年全体で一つの目標に向かって活動する様子を見ることができた。

新川 智哉　　教育学専修２回生

【済美小学校】 2025.6.25 奈良市青少年野外活動センター

■　自分で考えたこと

今回は初の野外活動支援に参加させていただいて、学級単位でものすごく多い子どもたちと交流をしたり、まとめていく難しさを学んだ。塾講師をやっているときは多くても二人しかいないので、そこまで難しく感じなかったのに、人数が増えるだけで、一気に声が届かなくなったり、

一つのグループの子どもたちの対応をしているとまた他のグループの子どもたちの対応が必要になったり、教師が思っていた数倍忙しいことに気づいたけれど、物凄く楽しい忙しさで教師になった自分にも活かせる内容であった。初めての野外活動支援で、わからないことが多く、先輩方に頼りすぎていた部分があると感じたので、次回からは経験した身として、進んで先輩に聞かなくてもしっかり自分の判断で行動できるようになりたい。

友田 歩夢　　数学教育専修１回生

【東登美ケ丘小学校】 2025.6.30 奈良市青少年野外活動センター

■　自分で考えたこと

小学五年生と大学入学後に初めて交流し、場を乱さないよう１人１人に寄り添って話すのが難しいと感じました。楽しそうに活動していても口ではだるい、やりたくないとずっと言っている子や、そもそも活動に参加しない子、元気すぎる子など、いろんな子がいて、その子なりの考えを持っている中で、みんなと同じ行動をしてもらうのが正しいのかもわからず、どのような言葉をかけるか悩みました。逆に嬉しい、楽しいと思ったところは、子どもたちが初対面でもたくさん話しかけてくれるところです。これはこの歳になると体験できないことで、質問してくれたり、一緒にスタンツに誘ってくれたりしたことが嬉しかったです。

門脇 那千加　　国語教育専修１回生

◇ 東大寺寺子屋支援（2025.9.26-27、東大寺）

■　概要

子どもたちが参加する東大寺寺子屋での補助を行った。子どもたちと一緒にグループで活動し、班補助という形で東大寺のフィールドワークに同行したり、食事の準備を協力して行ったりした。また、普段なかなか見れないような夜の大仏殿を見れるなど貴重な体験をした。

中本 宏美　　教育学専修１回生

■　自分で考えたこと

この東大寺寺子屋の支援を通して、普段できないような夜の大仏殿に訪れたり、お坊さんからの貴重なお話をたくさん聞けて、奈良に住んでいても遠足ぐらいでしか東大寺に訪れることがなかったので、東大寺のことを深く知ることができたと考える。

また、子供たちとの関わりを通して、フィールドワークなどで自分にはない視点から考えていることがあったり、考えを深めている様子を見ることができた。

この経験を通して、学びには、実際の場所や人との関わりがとても大切であり、実際に体験してたり、見たり感じたりすることで深まるものであると感じた。特に子どもたちが自分には思いつかない視点で物事を捉えている様子を見て、子どもの考えを尊重したり、子供たちが考えていることを引き出す関わりの大切さを学んだ。この経験は、将来教師として子どもと向き合う際の土台になるなと感じたため、この経験を活かして、さまざまな活動に参加していきたい。

中本 宏美　　教育学専修 1 回生

◇『ハチ宿アート展』運営支援（2025.11.23 奈良教育大学 教育資料館）

■　概要

「ハチ宿アート展」の運営支援として受付を担当した。本プロジェクトは、食糧生産や生態系の維持に不可欠なポリネーター（花バチ）の減少という世界的課題に対応する取り組みである。アートと教育を通してハチ宿の設置を広げ、花バチが安心して暮らせる環境づくりと地域をつなぐ「花バチの道」の創出を目指している。

ハチ宿とは（いただいたパンフレットより）、ヨシや笹、細い竹などを束ね、森や農園、住宅周辺に設置することで、筒状の空間を好む野生の筒花バチの産卵場所をつくるものである。卵は冬を越し、翌春に羽化する。日本には約 400 種の花バチがおり、そのうち約 60 種が筒花バチといわれている。本活動は、こうした野生の花バチを増やすことを目的としている。

金谷 双葉　　大学院教科教育専攻（音楽）M2

■　自分で考えたこと

これまでは、ハチに対して「刺すから怖い」というイメージしかもっていなかった。しかし今回の活動を通して、ハチが受粉を担い、食糧生産や生態系の維持に欠かせない存在であることを改めて知った。怖い存在として遠ざけるだけではなく、その役割を理解することの大切さを感じた。

主催者の奥様からもお話を伺った。自然には危険もあり、熊被害のような現実的な課題もある。それでも、一方的に排除するのではなく、どう共に生きるかを考える視点を持ち続けたいと思った。教育に関わる立場としても、先入観だけで物事を判断せず、多面的に捉える姿勢を大切にしていきたい。

金谷 双葉　　大学院教科教育専攻（音楽）M2

■自分で考えたこと

児童それぞれでできること、できないことが全然違うと改めて感じました。また、ハチ宿のお話を聞いて普段嫌いとか怖いと思っているハチが実は食物生産において重要な役割を果たしていることを知り驚きました。また、ESD の授業においてハチ宿を実際に作ってみることは良い体験だと思いました。

大塚 彩葉　　教育学専修 2 回生

◇『子どもおん祭り』運営支援（2025.11.29　ならまちセンター）

■　概要

春日若宮おん祭りについて子どもにクイズラリーやゲームを通して学んでもらうイベント。クイズラリーやゲームの中にはおん祭りに関する問題が含まれており、子どもたちは楽しみながら学んでいる様子が見られた。

辻 奏美　　教育学専修 3 回生

■　自分で考えたこと

おん祭りを行う奈良市内に住んでいながらもなかなかおん祭り自体をよく知らない児童が多いことから行われているイベントだということを教えてもらった。実際に子どもたちがクイズに答えたりスタンプラリーをしながら奈良の文化やおん祭りに触れる貴重なイベントになっていた。私は受付業務をお手伝いしていたため、子どもたちがどのように学んでいたのかを観察することはできなかったが、様々な世代のボランティアや文化を伝えてくださる方々の連携によって成り立っているところを見ることができた。特に子どもたちと一緒に来られた保護者の方々も熱心に掲示物や子どもが挑戦するゲームに見入っていたのが印象的だった。いくら子ども向けとはいえおん祭りのことをよく知らない大人もたくさんいるだろう。特にお祭りは保護者の参加度合いでも子どもたちの興味の示し方に大きな影響を与えるのではないかと考えた。また、最後には大太鼓の演奏があったのだが、大迫力で観客を楽しませていた。自分の知らない奈良の良さを発見できる機会になったと同時に普段生で聞くことができないからこそ観て、聴いて、一緒に手を叩いて参加したという体験から子どもたちが何か感じられたのではないかと考えた。

山田 真由　　教育学専修 3 回生

■　自分で考えたこと

ならまちセンターで行われた春日若宮おん祭の勧進と学習を目的としたボランティアに参加し、伝統行事を「知ってもらう工夫」の大切さを実感した。地域の子どもたちでもおん祭りの事を知らない子どもはたくさんいると思うが、受け継いでいくためにももっと興味を持ってもらう必要があると考えた。子どもおん祭りでは、クイズラリーを通しておん祭りについて知れるようになっており、子どもたちも楽しんで知識をつけることが出来そうであると考えた。

地域の伝統を次世代につなぐ活動に関わることができ、貴重な経験となった。

赤井 愛実　　教育学専修 3 回生

◇『あつまれ ECO キッズ！』運営支援（2025.12.6　ならまちセンター）

■　自分で考えたこと

今年は企業が協賛に入り、第 10 回と言う 1 つ節目の回だった。私は展示設営や、景品の受付業務を主にお手伝いさせていただいたが中でも印象的だったのは表彰式だった。自分なりにエコに

ついて考え、エコを提案した子どもたちの発想はどれも大人が考えさせられるものばかりだった。子どもたちの視点から自分たちに置き換えて考えることのできる提案をすると実は注目できていなかった当たり前のことや日常的なことばかりでお金のかからないような生活の少しの工夫が多かった。表彰式が、子どもたちにとっては自分の頑張りや考えたことが多くの人の前で認めてもらえる貴重な機会となり、大人にとってはエコについての見方を考えさせられる機会となっているのではないかと考えた。

山田 真由　　教育学専修 3 回生

■　自分で考えたこと

思っていたよりもたくさんの子ども達や保護者の方が参加されていて驚いた。景品交換所で子ども達がスタンプラリーの用紙を持ってきてくれるので、「どこ行ってきたん？」と体験してきたブースを聞くと、子ども達が楽しそうに体験した内容や学んだことなどを教えてくれた。中にはとても楽しそうに話すのだが「何か学んだことあった？？」と聞くと「よく分からないこと言ってた！でも楽しかったからいい」という子ども達もいた。どうやらパナソニックさんなどの少し難しい技術系の話がよく分からなかったようだ。ただ話を聞いていると全く分からなかったというよりも、はっきりと理解はできなかったという感じだった。「でも...なんかはしなくちゃって思った。よくわかんないけど、大人の人が頑張ってるなら自分もー！ってかんじ」とある子どもがその後に言っていて、こういったことが大切なのだろうなと感じた。言語化するのが難しいことを大雑把に掴むための言語化をすること。そのためには、子ども達の話を聞いてくれる大人の存在はとても重要であると思う。私達は、教師として比較的子ども達の近くにいる存在になる。子ども達が何かを体験してきたときに、それを子ども達がフィードバックできるように援助できればいいなと感じた。また、難しい内容を楽しみながらも印象に残るようにそれぞれのブースで努力をなさっているのが伝わってきた。それもあってか子ども達から具体的な話がたくさん出てきていたので、楽しみながら学ぶというのはやはり大きな力を持っているのだなと感じた。

紙飛行機とばし大会で、「広告だから織りにくい！全然飛ばせない」と子ども達が言っていたので、「遠くまで飛ばせてる友達に聞いてきてごらん」と言うと、色々コツを教えてもらいに行ったようで、そのコツを二人で色々な人に教えて回っていた。大会なので、勝ち負けがあるのだが、それよりもみんなで遠くに飛ばせたらいいねという空気がすごく良いと感じた。また、「広告は捨てるものだと思ってたけど、こうやって遊べるんだね」とある子がいうと「でも、結局遊んだ後捨てたら一緒じゃね」とある子が返し、二人でうーんと悩んでいる様子が見られた。しばらくすると、「今日のこの広告ってどうするの？」と二人が聞いてきたので「資源ゴミっていうのに出すんだよ。リサイクルみたいなかんじ」と教えてあげると、「なるほど」という満足そうな顔をしていた。紙飛行機作りから、資源のことまで考えられるのはすばらしいなと感心するとともに、このように遊びのなかから繋げられる題材は多そうだなと感じた。

岸本 樹　　教育学専修 2 回生

■　自分で考えたこと

運営ボランティアとして参加し、表彰式の様子を見たり準備を手伝ったりして、環境問題に取り組む地域の姿勢を身近に感じた。受賞した子どもたちが自分のエコアイデアを発表する表彰式に参加させていただいたが、環境について考えることの楽しさや意義が伝わってきた。また、環

境について考え、自分たちに出来ることはないかと一生懸命に考えている姿が印象的だった。環境について学ぶだけでなく、行動につなげる体験や交流が、人々の意識を高める力になると実感できた。これからも身近な環境を守る活動に関心を持ちたいと思った。

赤井 愛実　　教育学専修 3 回生

■　自分で考えたこと

今回のボランティアに参加して、地域でこのようなエコやお金について学習したり、仕事体験を行って大人と同じようにお給料を貰うような機会が設けられているのは学校だけでなく地域でも子どもを育てるという点でとても良い事であると感じました。このイベントでは仕事体験に参加しない子どもでも各企業のブースに参加することができ、当日も多くの子どもと保護者の方が来ていました。地域一体となって子供の学びをサポートするだけでなく、保護者も一緒に学ぶようなイベントは学校と地域のつながりを深めるという面でも重要な役割を持つのではないかと改めて感じた。

宮﨑 愛未　　教育学専修 2 回生

■　自分で考えたこと

エコキッズに参加してみて、去年のエコキッズでの活動を反省を活かして、積極的に子供たちに話しかけてみたり、皆さんのお手伝いになれるようにしたら良いことなどを自主的に聞くことを心がけました。紙飛行機大会で子どもたちが自分の飛行機を作り、試行錯誤して何回も作り直して頑張っている姿がとても印象に残りました。エコのことについて楽しく学べるとても良い機会だなと思いました。

多葉井 鈴華　　教育学専修 2 回生

ESD ティーチャープログラム ESD 演習

◇ 春日山原始林･奈良公園フィールドワーク

【第 1 回】 2025.4.27 春日山原始林の自然と課題（春日山遊歩道北部～若草山）

■ 概要

春日山遊歩道を歩きながら、春日山原始林や周辺の三笠山について理解を深めた。具体的には、春日山原始林の在来・外来の植物と外来種が侵入した歴史的背景、現在春日山原始林抱える課題とその原因や解決に向けての取り組みなどを学んだ。

新川 智哉　　教育学専修 2 回生

■ 自分で考えたこと

身近にある春日山原始林は意識しなければ「自然豊かな森」に思われたが、少し踏み込んでみると春日山原始林が抱える課題が見えた。たとえば、外来植物によって在来植物が侵食されていることである。外来植物の侵入はおよそ 800 年も前であり、もはや在来種と考えられそうだが、鹿の捕食対象とならないことやその?殖の強さから問題視されてきた。現在は各団体が外来植物を刈り取ったり、約 400 か所の柵を設けて区画整備を行ったりしているが、土地が広大で課題解決に追い付いていない。原始林といえど人の手によって外来種が持ち込まれたり、昭和初期には道路の開発が行われるたりするなど「手垢にまみれた原始林」である、との話を聞いた。もし、春日山原始林を訪れる人やその周辺に暮らす私たち 1 人ひとりが春日山の課題を知れば、現状の改善につながるのではないかと思った。

新川 智哉　　教育学専修 2 回生

■ 自分で考えたこと

私は奈良県で育って 20 年が経ちそうであるのに恥ずかしながら春日山原始林に入ったことがないどころか、存在すらも知らなかった。そういう点で春日山原始林という天然記念物に出会えたことそのものが学びであったとも言えるが、私が春日山原始林で先生の説明を聞いて一番衝撃であったのが、天然記念物である春日山原始林が、天然記念物である鹿によって破壊されている節があるということである。保護されるべき天然記念物がぶつかりあっってしまっているのだ。そこで鹿と春日山原始林がこれからも共存していくために必要なことを考えていきたい。一回目を終えての私の意見としては、鹿の個体数を減らすわけには行かないため、春日山原始林以外で、もっと鹿にとって住みやすい森林を増やしていくことが良いと考える。春日山原始林で鹿が植物を食べすぎるのが問題であり、普通に食べられる分には植物が増え過ぎなくなるというバランス管理に貢献すると思う。そこで、春日山原始林に集中するのでなく、天然記念物を守るために、他の森林を守り、豊かにするということが春日山原始林と鹿が共存することができる一歩になると考える。

友田 歩夢　　数学教育専修 1 回生

■　自分で考えたこと

前回は夜の春日山原始林を観察しに行ったため、今回は昼の春日山原始林でまた様子が違った。夜は、視覚情報が少なかったので、肌で感じるものであったり、様々な音が聞こえてきたりといったことが主要だったが、昼間はよく見えるので、木々の並び方であったり、葉の色・違いもよく分かり、春日山原始林をミクロな視点とマクロな視点両方で楽しめたように感じる。春日山原始林を歩いていると、外来種が多いことが分かった。数日前、中学生の子に、「外来種がダメな理由がよく分からない」と言われたのを思い出した。その子の言いたいことは、新しい種が入ってきたら多様性が高まるので良いことではないのかということだった。基本的、外来種は繁殖能力が高く在来種の環境を奪ってしまう。そうして、在来種がいなくなってしまうと、世界的に見れば種が減ってしまったことになる。小さい世界観ると、たしかになんだか良さそうなことも、広い世界で観たり視点を変えると疑問点・問題点が出てくるものだなと思った。

パッと見ただけだとそっくりな葉っぱも触ってみるとツルツルだったりざらざらだったりと違いがあるのが面白かった。子ども達も触ったりしながら違いを見つけるのは好きそうだなと思った。自然の中の特徴には必ず理由がついてくるものであるので、その理由まで考えれるような学びができるといいのかなとも感じた。

鹿との共生の在り方が難しいなと感じた。鹿と人間が築き上げてきた伝統もあるのでそれも守らなければならないように感じるし、かといって鹿が増えすぎていることで自然が壊されてしまっている現象を放置してしまうのは、これまで守られてきた環境を壊してしまうことになるので、それは良くないことだなとも思い、そこの折り合いをどのように付けていくのかが難しいと思う。

岸本 樹　　教育学専修２回生

【第２回】　2025.6.21　雨の日の森を歩く（春日山遊歩道北部）

■　自分で考えたこと

初めて春日山原始林に入って、自然の豊かさを感じた。奈良は自然が多いが、原始林は涼しく、鳥の鳴く声や風の音などもはっきりと聞こえて自然を感じるのに良い環境であった。見たことのない植物や昆虫を発見した。似たような植物がたくさんあり、よく観察すると、葉の先が２つに分かれていたり、葉や花の生え方が違ったり、小さな違いがあり面白かった。ケヤキとナギを比べて、見るだけでなく触ることで、感触や温度の差に気づいた。柔らかく温かい感じと硬く冷たい感じに自然を感じた。ここで触ったナギは竹柏と書き、外来種であることに驚いた。また、ナギが増えすぎている問題を知り、伐採し木材として再利用するか、成長した早い段階で抜き別の場所へ移植することが解決策であると考えた。イチガシは照葉樹であるとしり、光を反射していると学んだ。正しい照葉樹の定義も知ることができた。昆虫では、ザトウムシ、ヒル、ガの幼虫、ナメクジが印象に残っている。ザトウムシの細い足で体を支えていた。「千と千尋の神隠し」のかまじいに似ている

と言われると、イメージも湧きやすく、子どもたちに言ったら「あぁ～～」と言う反応するんだろうなと想像できた。水辺に行くとヒルがいて、さらに靴に付いていて驚いた。塩をかけると縮んでいたのが印象に残っている。さらに蛾の幼虫も発見した。少し弱っていたが大きかった。帰り際には大きなナメクジを発見した。15 センチほどでこの大きさは見たことがなかった。何を食べればこんなに大きくなるんだろうと疑問に思った。餌となる植物が豊富な原始林だからこそ大きく成長したのだと考えた。

春日山原始林は人が手を加えることは滅多にない。だが、間接的に人間が悪影響を及ぼすこともある。これほどの自然があることを知り、この自然を保護するためにはどう言う行動を心がければ良いのか考える必要があると思った。

青木 海　　音楽教育専修 2 回生

■　自分で考えたこと

今回の春日山原始林は入るのが 2 回目なので、自分なりに目標を持って参加した。その目標は「木や草の葉っぱの特徴をしっかり見つめていくこと」である。これを意識して葉っぱをみたり触ったりすると、春日山原始林は本当に多様な植物がいることがよくわかった。そんな中、今回特に取り上げたいのは「凪（ナギ)」である。ナギは一見広葉樹に見える葉っぱをしているが、平行脈を持っているからトゲトゲしていないのに針葉樹と聞いて、衝撃を受けた。私が今回ナギを取り上げる理由は、ナギによって春日山原始林の植物多様性が失われつつあると聞いたからである。このナギは耐陰性が強く寿命が長いことでどんどん増えていく上に、異臭を放ち、鹿はこれを食べず、ナギにはアレロパシー効果という周囲の植物の成長を妨害するものも有していて、これによって春日山原始林はナギが大量発生して、植物多様性が失われつつある現状である。これらを抑制するために、やはりナギは個体数を人の手によって減らす必要があると思う。その時に得られる木をまた春日山原始林やその周辺にある春日大社の修繕などに利用することで、自動車による排気ガスを減らし、天然記念物を守ることにもつながって良いのではないかと考えた。

友田 歩夢　　数学教育専修 1 回生

■　自分で考えたこと

今回初めて春日山原始林に行って、多種多様な植物があり、また人が手がけて守られているというよりかは自然のまま作られているような感じがした。そして今回梅雨の中という予定だったが快晴のため、森の中と森の外との気温差をとても感じられた。その森の中には照葉樹林という光を反射させる種類の木々が生えていることにもついて初めて知り、透ける葉っぱしかないと思っていたので大変驚いた。目を瞑り自然を感じる体験では、五感をフルに使い音や風、気温などを感じた時、普段何気ない生活で使っている五感の使い方とは全く違い、耳の横に手を当てた時の音の感じ方はいままでにない体験で、自然の音を目一杯聞いたのは初めてでした。観察を通してヤママユガを見つけ、今にも死にそうになっていました。傷ついていたのは高いところから落ちてしまったのが原因だとは思うのですが、なぜ落ちたか考えた時に、捕食者または人間があげられます。人間だった場合何かを探している途中や掘ったり取ったりすることで落ちてしまう様に、知らぬ間に傷つけている可能性があるのではないかと考え、むやみやたらな行動は避け、もしも自然環境を一時的に変える場合はなるべく元通りに戻すという人間側が責任を持つことでより自然は保たれるのではないかと考えました。他にも夜によく見られるナメクジが日中に出てい

たこともしかすると環境の変化により移動せざるおえない状況に変えてしまっているのかもしれないと思いました。例え動物側が変えていたとしても、人間の都合で変えてしまった環境に動物が適応できないという場合には目をつぶることはできない。今回のフィールドワークでは人間が環境をどれだけ変えているのかという実感を自然の中で大変感じることができた。教師という立場に立った際に環境問題という総合学習を行うとなった場合春日山原始林の様な地域の森であったり自然が溢れる場所でのフィールドワークを今回の様な進め方のもと、事後学習として環境について考える機会を作りたいと思いました。

高岡 丈　　音楽教育専修 2 回生

【第 3 回】2025.7.12　春日山の夕暮れ～夜（春日山遊歩道南部）

■　自分で考えたこと

これまで春日山原始林は遠くから見る経験しかなく、世界遺産であるということは知っていたが、関わりとしては「見る」だけでは静かにそびえたつ山という認識でしかなかった。今回、「森の息遣いを感じる」ということではじめて遊歩道を歩いてみて、耳を澄ませると、ヒメハルゼミ等の虫や動物の鳴く声や木々が鳴らす音等が色々な方向から聞こえてきたり、肌で感じる空気や匂いも加わって、森が生きている・動いているという感覚になった。ただ五感を使って色々な事を感じるからだけではなく、場所や時間によっても移り変わっていくところがよりそのような感覚にさせてくれるのではないかと思った。そのような感覚になることで自然と一緒とまではいかないが、なんとなく自然の中に自分が溶け込むことが出来ていると感じた。

歩いているだけでも様々な事を感じることが出来るが、森にいる虫や植物、植生については杉山先生が立ち止まって話をしていただかないと、何も気づかずに通り過ぎてしまいそうになることが多かった。ヒメハルゼミが合唱するように鳴くこと、人に近いところに生えていることが多いイチイガシの木が減っていること、木の根が見えている良くない状況がみられること、原始林は極相の状態であること、他の木が倒れてきたことにより木の幹が曲がっていて、さらに光を探してさらにのばしていくことなど、森ひとつみても知らないことがとても多いと感じた。一つ一つの動植物にそれぞれの特性があって、それが複雑に絡み合って森になっているのを、ほどいていく感覚が面白いと思ったので、子どもとフィールドワークをする機会があったらそのような面白さを伝えることが出来たら、より自然が好きになり、ESD で育みたい価値観である「自然環境・生態系の保全」にも繋がるのではないかと考えた。

池本 翔真　　教職大学院 M1

【第 4 回】　2025.8.9　奈良公園の夕暮れ～夜（なら燈花会・二月堂周辺散策）

■　自分で考えたこと

地元が大阪であるため、なかなか夜の奈良を散策することがなくとても新鮮だった。奈良市を舞台に地域学習を作った際、東大寺を扱ったグループがいて大学生になってから東大寺の門を見

に行ったことはあったが、柱のつくりや蝶番などまだまだ知らない昔の人たちの工夫があることを知った。東大寺を扱うとなるとどうしても中の見学ばかりに目が行ってしまいがちであると思うがゆっくり散策することで東大寺に入らなくても昔の人たちの知恵に触れられるとてもいい教材だなと思った。二月堂も初めて行ったが登っていくと夕暮れだったのもあってとてもきれいな景色を見ることができた。当時の人たちと見える景色に変化はあるだろうが、同じようにここから夜景を見ていたのかなと思うと長く建築物が残っていくことはとても興味深かった。

また、燈花会は２回目の参戦だったが、去年行った時はロウソクや屋台にばかり目が向いていたため、あまり気づかなかったが観光客だけでなくたくさんの地元のひとたちだとみられる人が参加しているのだなと思った。イベントやキッチンカーをしている人たちもたくさんいて地域で盛り上げるイベントとなっているのが良く分かった。しかし、ロウソクを立てるボランティアの人手が足りていないということにとても難しさを感じた。自分の地元でもふとん太鼓のお祭りがあるが、最近「僕たちと一緒に担ぎませんか？」といったようなポスターを目にする機会が増えた。伝統を受け継ぐことやつなぐことも「長くやってきたから」というだけでは地域の人たちになかなか賛同してもらえないのが現状なのかなと思う。だからこそただ受け継ぐということではなく改めてこの伝統がつながって来た意味や意義をより多くの人たちに知ってもらう必要があると考えた。学校教育で伝統を扱うことがあるとすれば「つないでいこう」と言うことを伝えるのではなく、「〇〇のこういうところがいいから受け継いでいきたいよね」というような思いが生まれる授業を考えていきたい。

山田 真由　　教育学専修３回生

■　自分で考えたこと

今回のフィールドワークでは地域の人やボランティアの方との関わりというものを深く感じる場面が多いように感じた。東大寺の二月堂に行った際に福引のような催しがされていた。その際に払ったお金というものはどのように使われるのだろうと考えた。働いている人のお給料なども考えたが、一時的に行われていたものであったため、東大寺のために使われていると考えた。そして東大寺が現在工事されているのを二月堂に着くまでに２箇所ほど見かけたため、基金を集めるためのものだと考えた。友達とお金を出し合って買ったためどういうものかがわからなかったがお金を出した友達がおそらく名前などを書いていたりしていたので、やはり奉納といった形での基金集めだろうと考えた。これは地域の人または観光客の方であったり、人々の力で成り立つものであり地域のつながりがあって現存につながるのだと感じました。（あとで調べてみると、功徳日の日でその日のお参りは４万 6000 日分のお参りに相当するという日であったためそこで行われていたイベントのようなものであったことがわかった。しかしこの行事の有無にかかわらず寺社での奉納は現在させていくなどの将来的な効果も期待できるのではないかと今回自分なりに腑に落ちた考え方を持つことができた。）

一方燈火会ではボランティアの関わりをたくさん感じることができた。燈火会のキャンドルや火をつけたりするのが一つ一つ人の手によって行われているということをはじめて知り大変驚いた。このような意思がある人が集うことでこれまで行われてきた伝統を崩さずに続き、継承され続けていることに大変感動した。

どちらのことに関しても人との関わりというものが大きく影響しており、私たちがそれを実際に見ることができるのも人とのつながりがあるからこそ行われており、文化や歴史、遺産の継承には欠かせないものだということを学びました。

高岡 丈　　教育学専修 2 回生

■　自分で考えたこと

東大寺南大門では、柱の間を貫が通っていて、大仏様といわれる丈夫なつくりになっていることを知ることが出来た。また、蝶番があることを初めて知った。ほかにも、阿形像と吽形像を観察した。像にばかり気を取られがちであったが、よく見てみると足元には邪鬼がいることを知った。鐘楼について調べてみると、大晦日の日には一般客が 8 人 1 組で鐘を撞くことができることを知った。二月堂では、功徳日が開催されている日だったため、万灯明や福引を見ることが出来た。二月堂からの眺めや提灯がとても綺麗で奈良公園付近よりも涼しかった。

二月堂から降りて奈良公園に向かった。その際に通った道はあまり人がおらず、静かだった。すぐ目に付くものに気を取られがちであるが、視野を広くして細かく見ることで発見できることや深められることがあると考えた。

赤井 愛実　　教育学専修 3 回生

■　自分で考えたこと

今回のフィールドワークでは、はじめに東大寺二月堂周辺を散策した。東大寺方面に向かったのは小学生の頃だったのであまり覚えていなかったが、歴史的な趣を感じることができた。

東大寺南大門には金剛力士像や狛犬が凛々しく佇んでいた。また南大門では大仏様が取り入れられており、節約しつつ強度のある木造建造物となっていることを知った。木に木を差し込み貫通させることで頑丈に支えることができる大仏様を取り入れた重源に感心した。扉が付いていた跡も興味深かった。表に大華厳寺と書かれていたが横書きかと思いきや縦書きであることに驚いた。

中門では兜跋毘沙門天や持国天の存在を初めて知った。兜跋毘沙門天を見た時下に悪い者が踏みつけられているのかと思ったが、兜跋毘沙門天が地から出てくる時に支えた地天女であると分かった。また、持国天の足元には邪鬼がいると分かった。普通とは違う毘沙門天の姿や呼び方を見て興味を持った。

東大寺鐘楼では大きな鐘に圧倒された。大金持ちの札のお話が面白かった。二月堂では、奈良の町が一望できた。登るまでにあった滝や階段の模様にも興味を持った。二月堂からの景色から、都市である奈良と古都である奈良が上手に共存していると感じた。伝統や文化を大事にしているからできることであると考えた。福引もやっていて懐かし

い感じがした。定期的に二月堂を訪れ、季節ごとの風景が見れたら良いと思った。

なら燈花会は、まだ行ったことがなかったのでとても良い機会になった。奈良公園を通る時は昼間であったりと火が灯されているところを見たことがなかった。たくさんのろうそくが並べられていて綺麗だった。暗い大地に浮かび上がる火がまさに花のようでお花畑にいるような気分になった。優しくてあたたかく、懐かしい感じがした。訪れていた人々の年齢層も広く、こうやって伝統文化が受け継がれていくのだと感じた。外国の人にも日本ならではの良さが伝わると良いと思った。

青木 海　　音楽教育専修 2 回生

【第 5 回】　2025.10.4　朝の春日山原始林（滝坂の道）

■　自分で考えたこと

高畑を散策することも春日山に登ることも初めてだったので新鮮でした。普段は目に留まらない道に生えている草について、鹿が食べないから残っているのかと考えたり、昔の鹿の罠を見て、当時から鹿に困って工夫を凝らしていたと気付けたりして、今までにない着眼点と先生のお話で大変勉強になりました。また、散歩のさまざまな楽しみかたを知ることができました。ヒルというのは知識でしか知らなかったのですが、ナメクジを細くしたような見た目で静かに這い上がってきた時には驚きました。先生が、ヒルは二酸化炭素に反応してやってくると聞いてなるほどと思いました。知識で知っているだけでは何も思わないようなことも、実際に実物にあってからヒルについて知った方がとても面白いし頭に残りました。何事も自分で体験して学ぶということの大切さを改めて実感できました。

岡田 葵　　音楽教育専修 1 回生

■　自分で考えたこと

春日山を歩いてみて、鳥の鳴き声が聞こえてきたり、動物がいた形跡がみられたり、雨が降っていたこともあってヒルが出たりして、とても自然を感じた。春日山から降りてきて改めて春日山を見てみるととても幻想的な景色が広がっていた。大学の近くにこのような壮大な自然があることを再認識できたとともに、たまには自然と触れてみることの良さを感じた。

また、高畑町の周辺をあまり歩いたことがなかったので、歩いてみると知らなかった神社やお店などがたくさんあった。時間があるときに知らないところを探索してみるのもいいことだと気付いた。

今回の経験を生かして、今後は意識的に身近な自然や地域に目を向け、知らない道や場所を歩いてみる時間を大切にしていきたいと考えた。また、ただ歩くだけではなく、「知ろう」とする姿勢がとても大切であり、その姿勢があることでその地域を理解することにつながると感じた。周囲にはまだまだ目に入っていないところがいっぱいあることを改めて実感したので、少し視点を変えてみたりしながら生活していきたい。

中本 宏美　　教育学専修 1 回生

■　自分で考えたこと

雨の中の朝の春日山原始林を歩いた。山の中では、鹿や鳥の鳴き声が響き、動物の足跡も見られた。山を下りた後に改めて春日山を眺めると、霧がかかり幻想的な景色が広がっていた。大学の近くにこのような壮大な自然があることを知ることができた。

雨の日のフィールドワークだったが、雨もまた自然の一部であり、その良さを感じることができた。目を閉じて顔を少し下に向け、耳を澄ませてみると、葉に当たる雨音や土に落ちる音が重なり合い、とても心地よい響きが聴こえた。普段は避けがちな雨も、感じ方次第でこんなにも豊かな体験になるのだと気づいた。

金谷 双葉　　大学院教科教育専攻（音楽）M2

【第 7 回】　2025.11.1　奈良公園の自然（奈良公園・飛火野周辺）

■　自分で考えたこと

今回の演習で印象に残っていることは、葉っぱ遊びです。ただ「見つけた葉っぱを観察してください。」だと面白くないし、児童も興味を持ってくれないと思います。葉っぱじゃんけんだと自然と葉っぱを観察する機会ができ、またじゃんけんでより有利になろうといろいろな種類の葉っぱをたくさん集めることができると考えました。遊びを上手に交えることは、児童が勉強しているというよりも、楽しみながら自然と勉強でているに変わると思いました。また、散策ではいかに教師が生徒の興味をそそる知識を与えることが大事だと思いました。私は今日、木の中に竹が生えていることに興味を持ちました。

大塚 彩葉　　教育学専修 2 回生

■　自分で考えたこと

ビンゴの活動を通して、奈良公園、飛火野周辺の色々なことを発見することができました。一回も行ったことがなかったけど、鹿の鳴き声や葉っぱや、どんな歴史があるのかなどを教えていただきました。子どもたちにビンゴを通して遊び感覚で自然にふれ、感じで考えることができてとてもいい課外活動だなと思いました。また、ビンゴだけでなく、葉っぱじゃんけんでとても盛り上がりそうだなとおもいました。

多葉井 鈴華　　教育学専修 2 回生

■　自分で考えたこと

奈良公園で 1 時間、自然の中で過ごした時間は、普段なかなかできない経験であるため印象に残った。落ち葉を拾い、落ち葉ジャンケンや色ごとに並べる活動は低学年の子どもでもできるし、盛り上がった。

ディーアーライン(deer line)や、木の中に竹が入っている現象がどうしてなのか？と考える活動は深い学びにつながった。子供たちにもこのように考えてもらいたいと思った。そのためには、私が単に知識をつけるだけでなく、筋道を立てて理屈を考えることも必要だと思った。

辻 奏美　　教育学専修 3 回生

◇ 万葉集・明日香村を中心とした授業づくりセミナー

【第１回】　2025.5.24　　近隣のフィールドワーク（万葉文化館周辺）

■　自分で考えたこと

甘樫丘展望台へ行く道中にあった歌碑が建てられたのは、ホテルの建設への反対運動であり古代と現代とを結ぶ重要な文化財だった。また、飛鳥坐神社での祭り「おんだ祭」では、昔から人のまぐわう姿を模して豊作を願っていた。

今まで歌碑について考えることはほとんどなかったが、今回のように歌碑が今と歴史をつなぐ場合があるためここの切り口で遠足や修学旅行の教材にもできそう。ただ、学校教育の時にも勉強したように「どう残すのか」をテーマにするのではなく「なぜ残すのか」「残すべきなのか」ということを子供たちには考えさせてあげたい。また、展望台付近からは飛鳥の都の跡地がよく見えるため「采女の　袖吹きかへす　明日香風　都を遠み　いたずらに吹く」の解釈がとても分かりやすかった。もし、私が国語の教師なら現地に行って和歌を解釈することもさせてあげたい。そうすることで和歌に興味を持つ子が増えれば、万葉文化館の職員さんのような人材を育てられるかもしれないと考えた。

松原 大空　　英語教育専修１回生

■　自分で考えたこと

（蘇我入鹿首塚）　蘇我入鹿に関しては歴史の教科書で名前を見るだけで、正直なところあまり印象には残っていなかった。しかし、首塚を見たことで入鹿がかつてのこの地に住んでいたのだということに対して実感が湧き、すこし興味を持てるようになった。全国に首塚とされるものは存在しているが（平将門の首塚など）入鹿の首塚を見て、飛鳥の時代から首（頭部）には呪術的な力があると考えられていたのだろうか面白く思った（もっとも、入鹿の首塚が建設されたのは近年なのかもしれないが）。

（甘樫丘）　甘樫の丘を登って、その見晴らしの良さに驚いた。ビルやホテルなどの高い建物がなく、景観が守られていることがとてもありがたいことだと感じた。丘から都が一望できたのだろうかなど、想像するのも面白い。また、歌に詠まれた山々をみることもできたが、その低さに驚いた。「山」というとどうしても八ヶ岳や富士山のような山をイメージしてしまうため、和歌を詠んで思い浮かべる情景にもかなり地域差があるのではないかと思う。

（飛鳥坐神社）　創建年代は不明ということであったが、かなり歴史がある神社だと感じた。本社の御祭神が重要神ばかりであることからも由緒正しい神社であり、昔はかなり多くの人が訪れる場所であったのではないかと想像できる。

（大原神社・大伴夫人墓）　「わが里に大雪降れり」「わが丘のに言ひて」の歌が近い場所で歌われたという知識はあったが、実際にその近さを目で見て歩いて感じることができ、よりこの二首に対する理解が深まったように感じて嬉しかった。

今回、散策していく中で様々な万葉歌碑を見たが、自分の住む場所や近い場所にそうした歴史的なものがあるということはとても貴重であるのだと居らためて思った。子どもたちにもそうした価値を感じてもらえるような授業を考えていきたい。

勝田 南美　　国語教育専修３回生

【第２回】　2025.7.19　万葉集についての話題提供、館内見学（万葉文化館）

■　自分で考えたこと

ARのような取り組みをしている博物館や美術館はどんどん増えているイメージがあるが、視覚的な情報がふえるという点や音声案内ができるという点などからやはり効果的だろうと思った。現代の技術と古典や歴史、考古学が結びついていくことは好ましく思われる。教育においてもICTと結びつけた古典の授業を構想していきたいところである。

万葉の植物は展示されているもの以外にも沢山あり、150種を超えるらしいと聞いて驚いた。和歌と自然の結びつきの強さが伺える。自然信仰の影響もあるのだろうと思う。花弁が大きく華々しいものばかりではなく慎ましやかなものもある所が良い。

銭は一枚一枚作っているというイメージだったため、何枚かつながった状態から切り離して一枚一枚にするということが興味深かった。今でいうプラモデルみたいだと思うと親近感が持てそうである。「富本銭作成キット」のような教具がつくれそうだと思った（繋がった状態の富本銭を切り離してやすり等で綺麗に成形するまでの体験ができるようなキット）。

和歌のよみかたに関しては、音声を残す手段が無かったためどのように詠まれていたかは想像するしかないのだが、和歌は声に出すことが重要だと思うため、是非授業でも試行錯誤していきたいところである。一般的には競技用百人一首の詠みあげ方に則って詠まれることが多いのではないかと思っているが、Jpop風やラップ風など様々な音源を聞かせたり、子どもたちに自由に詠んでもらうというのもいいのかもしれない。そもそも古代も歌の詠み方は人それぞれだった可能性もあるのだと考えると、和歌の詠み方の工夫は無限に広がるように思われる。

歌のトンネルに入った時に、このトンネルは最先端の科学館にありそうな近代的な展示だと思い驚いた。和歌と現代の歌のつながりのようなものを考えるのも面白いと思う。例えば、和歌の型（５７５７７）と同じように今の歌にも型がある（Aメロ、Bメロ、サビ等）ことなどは少しでも和歌に親近感をもってもらえるような材料になるのではないかと考えた。

最後の話し合いのときに、和歌の内容（意味）と修辞法に関する話題が出たが大変興味深く拝聴した。内容と修辞法は切り離せるものではないという話には深く納得した。修辞法は修辞法そのものについて学んで終わりにするのではなく、基本的な情報を学んだうえで、ではなぜこの文ではこの技法や助動詞が使われているのかということまで考えるところにまで到達しなければならないと感じた。修辞法から作者の意図を考察することで内容の理解もより深まるのであろうと思う。恐らく、今までの学校教育でも現在の現場でもその点はあまり意識されていないのではな

いかと思われる。そのため、修辞法を学びながらも、内容を深めていける授業を考えることが今後の和歌学習の課題なのではないかと思った（特に高校において）。

勝田 南美　　国語教育専修３回生

◇『森と水の源流館』オンラインセミナー

【第５回】　2026.2.7　オンライン

■　自分で考えたこと

地域に関連する活動を授業に取り入れ、地域に還元する活動に繋げる流れに興味を持った。また活動を取り入れるのみではなく、環境に配慮した部分を取り入れることでESDにも関心が向くような内容となっていた。

ただ地域に関連させるだけでなく、ESDの要素を取り入れた取り組みづくりが難しいと感じた。そのため、地域で問題となっている事柄を取り上げてESDに繋げる方法について自分でも考えて行きたいと考えた。

宮﨑 愛未　　教育学専修２回生

◇『近畿ESDコンソーシアム成果発表会・実践交流会』ESD子どもフォーラム運営支援（2026.1.11 奈良教育大学 大会議室）

■　自分で考えたこと

子どもたちは自分で思っているよりもしっかり発表できるし、手を挙げて発問もできる。

学校の先生という立場になっても、より自分の理想を目指して課題を追求し続ける姿がかっこいいと思った。

準備や作業全てにおいて、初めてだったのもあるだろうが、全部聞かないとわからなかったし、イメージがつかないためもたついたシーンが多々あった。

教員になる時、教育実習に行く時に、子どもたちの力を低く見積もらない。生徒に授業をするのではなく、「生徒と」授業すら心構えで行きたい。生徒と共に、町のため、学校のため、生徒のために躍進している先生方から、教員になるだけがゴールじゃないと学んだ。仕事につけたからと気を抜くのではなく、今自分のある位置から常に「何をしたらさらによくなるか」を考えて行動できる教員になりたい。

今回の企画に来年も参加し、次は自分の仕事をちゃんとこなしたい。今回先輩がなん度もサポートしてくださったので、私も来年は、「自分で全部やる」のではなく、後輩を育てる機会として支えたい。

門脇 那千加　　国語教育専修１回生

■　自分で考えたこと

何もないと思っていた地元のことを調べて、自分たちでお祭りを開催する過程で地元のことを知れたり、愛着がわいて自分たちの地元を大切にしたい、伝統を守りたいという気持ちが生まれてくる。実際に自分たちで行うことで、祭りがただのイベントではなくて地域のつながりを深めるというような役割を実感することにつながる。子どもたちが自分たちの手でお祭りを作り上げていく中で、人と協力する態度や協力して何かを行う楽しさを身に付けることができたのではないかなと思う。

琵琶湖システムを調べ、啓発活動を行うという活動をすることで生徒自身が目的意識をもって活動に取り組むことができるし、啓発活動を行って沢山の人に知ってもらうということで持続可能な社会というのが実現できるのではないかと思う。生物多様性を守っていくための活動を様々な角度からアプローチしていた。いろいろな角度からのアプローチによって、触れ合う人の幅も広がり、より多くの人に生物多様性について考えるきっかけになると思った。

光延 ひなた　　家庭科教育専修 3 回生

■　自分で考えたこと

小学校の発表では、神輿を遠いところから運んでこられており、たくさんの飾りが施されていて、とても素晴らしいものでした。そして発表の際に、中学校高校の生徒たちに声をかけ、神輿を担がせている姿が、みんなを巻き込んで場を盛り上げるのって最高だなって見ていて思いました。そして何より、一度途絶えたことをもう一回行いたい、というみんなの気持ちが行動に移せていることが、何よりもいいなと感じました。祭り行う、ということはそう簡単なことではないと思うので。

中学校の発表は、琵琶湖システムの発表でした。今年の 11 月末に、及川先生の授業で、フィールド演習として琵琶湖博物館に行っていたので、話がとても身近でわかりやすかったです。外来種が増えてきている中でどのような対策が必要かや、ゆりかご水田などについて詳しく話しているのがとても印象的でした。

高校の発表では、ピートモス採掘と糞土、ミニ生物多様性センターを先輩から引き継いだ 786 種の生物を校内で見つけている、ということを発表していました。糞土の歌はリズムが面白いなと思いました。そして、小学生の質問で、見つけた中で食べられるものはありますか？見つけたときどんな気持ちでしたか？と可愛らしい質問が投げかけられており、それに対してとても優しい言葉で答えていたのが良いなと思いました。

全体的な発表の印象として感銘を受けたのが、ほとんどカンペを呼ばずに覚えていたのが素晴らしかったです。ESD センターの引率をしたあと、控室で中学生に緊張してる？と声をかけると、大丈夫！と言いながら、セリフのプリントを何度も読み上げていました。その様子からとても頑張って覚えたんだろうなと伝わってきました。

そして最後に班になって「今からやる！」みたいなのをグループに分かれて話し合うときに、ユネスコの人たちが 1 人ずつ話す機会を与えて、意見を共有しているのがとても良かったです。そんな中で一番気になったのは、防犯カメラの設置とホワイトボードに書いているところがあり、これがどう ESD に繋がるのか、私にはよくわからなかったです。設置して野菜とかを動物に

食べられないように見張る？みたいなことなのでしょうか。この意見にはとても興味が湧きました。

私はこの発表会を今回初めて知ったのですが、保護者の人たちや奈良教のたくさんの先生が参加されており、とても大きいものでした。そして、この発表会に参加して、エコバッグを持参することや、暖房をできる限り我慢すること、移動に車ではなく、自転車を活用することなど、自分の行動を改めて見直すことができました。そして、どうやったら持続可能な担い手の育成ができるのかな、ということを考えたり、このような意見交流を行うことの大切さを感じたりして、とても自分の中で大きな学びに繋がったなと思います。

山下 恵　　音楽教育専修 4 回生

奈良 ESD 連続セミナー

【第 1 回】　「SDGs の理解促進」

■　概要

セミナーでは、SDGs と ESD の関係について学んだ。まず、持続可能な開発とは「将来の世代がそのニーズを満たす力を損なわずに、現世代のニーズを満たす開発」のことであり、経済成長・社会的包摂・環境保護の調和が求められるものである。

SDGs は 2016 年から 2030 年までに達成を目指す国際目標で、「誰一人取り残さない」を理念とし、17 の目標と 169 のターゲットから構成されている。特徴として、普遍性（すべての国が対象)、不可分性（目標同士が相互に関連)、変革性（社会の仕組の転換を目指す）が挙げられる。

こうした SDGs 達成の鍵となるのが ESD（持続可能な開発のための教育）である。ESD は、新たな価値観や行動の変容を促し、持続可能な社会の実現を目指す教育活動であり、「教育の質の向上（E)」と「教育が持続可能な社会づくりに貢献する（SD)」という両輪の連結が特徴である。

また、ESD は特定の教科や単元に限られるものではなく、日常の教育活動そのものが持続可能な社会づくりに資するものであることも確認された。身近な生活の中にある課題や、見えにくい構造に目を向ける視点が重要である。

金谷 双葉　　大学院教科教育専攻（音楽）M2

■　自分で考えたこと

大学に入って SDGs や ESD を学ぶ機会が何度もあったが、そのたびに「むしろ SDGs に全く関係しないことはあるのだろうか」と思うほど、SDGs の問題は様々なところにかかわっていると感じる。

「平和とは何か」という話があったが、確かに「戦争がないこと」だけを平和というのは違うなと感じた。実際私は比較的平和な国に生まれて生きていると思うが、真に平和かと言われればいじめや差別、貧困などの問題はすぐ隣にあるように感じるし、事故や事件も比較的身近に潜んでいる。日本は災害大国ともいわれる国で、地震などの災害がいつ訪れるかもわからない状況にいる。そんな中で「私は平和な国で生きています」とは言い難いが、終わらない戦争の中にある国に比べれば平和であることは間違いなく、やはり「比較的」平和な国というのが妥当なのだろうかと考えていた。

SDGs が目指す世界像では、「すべての人生が栄える」とあったが、実際にその世界が実現したとして、貧困や飢餓・病気がなくなれば、世界の人口は今よりももっと増えることになると思うが、そうするとその分また食料や職が必要になる無限のループに入るような気がして、実現するのは難しいように感じた。貧困に関しても、例えばすべての職業の労働時間と賃金が一定で国民全員が同じ所得になれば貧困はなくなるかもしれないが、生活の差によって出費は異なるので十分なお金があると思う人もいればお金が足りないと思う人も出てくるだろう。そうすると「人生が栄える」とは言い難いような気もする。また、専門的な知識や技能が必要とされる職種でも賃金が一定ではなり手が減ってしまうことも考えられる。しかしかと言って賃金を変えてしまうとまた貧困のループが始まってしまうので、これもまた実現は難しいように思う。確かに貧困や飢

餓はなくなるべきだが、相対的貧困の尺度では貧困をなくすのは難しく、あるべきは「相対的貧困と呼ばれる収入でも充実した生活が送れる社会（全体のレベルが高い社会）」なのではないかとも思った。

藤原 萌　　音楽教育専修 4 回生

■　自分で考えたこと

持続可能な開発の達成のためには、環境保護だけでなく、経済成長や社会的包囲が必要になってくることが分かった。いじめや児童虐待が世界平和の視点につながっているのは興味深いと思った。SDGs の基盤となるのが自然環境でまずは私たちが生活している場所を未来に残せるようにしていく必要があると分かった。そのあとに、社会・経済と続き、今は経済発展を優先しすぎてしまった、優先順位を間違えてしまってこのような問題が起きているのではないかと感じた。気候変動はもう身近になっている現在、それに関する対策だけでなく、原因をなくすための取組みを社会全体で考えていく必要があると考えた。

井上 愛香　　家庭科教育専修 3 回生

【第 2 回】　「ESD の学習理論」「単元構想案の作成に向けて」

■　概要

ナッジとは、強制することなくその人がよい行動をするようにそっと促すことであり、日常生活の中でもナッジが活用されている。その中の一つにまずナッジ・デフォルトがある。そのようにしてほしいことを初期設定しておくことで、例えばレジに並ぶまでの誘導案内の印などがある。次にナッジ・フィードバックがある。ある行動をすると、ある特定の反応が返ってくる仕組みをつくることで、例えばレンジに物が入ったままになっているとピーピーと音が鳴る仕組みがある。次にナッジ・インセンティブがある。ある行動をすると得する仕組みを作ることであり、指定の商品を購入すると 50 円引きキャンペーンなどがある。最後に、ナッジ・選択肢の構造化がある。選択肢を分かりやすくすることで、ある行動や特定の選択に導く仕組みをつくることであり、例えばおすすめの商品が大きくメニューにのっているなどがある。

SDGs を達成できるようにするには、行動の変革を促す必要があり、ESD によって“意識して”できるようになることが求められる。そのときに大切なのは、直感的意思決定論の考え方である。すべての動物には、ソマティックマーカー＝脳内信号発生装置が備わっており、人間は生き残るために地域の社会文化に即したふるまいを促している。

フードマイレージは、重さ×距離で表される数値で、私たち消費者が購入するまでの負荷がわかる。移動のためにエネルギーを沢山使っていたり、CO2 を沢山消費していることから、フードマイレージの値が小さい方が良い。しかし、うなぎなどの絶滅危惧種は消費しすぎてはいけないため、食料を購入する際には、自然と総合的な知識を持って購入を決定することが大事である。SDGs の概念には、多様性・相互性・有限性などの実態概念と、公平性・連携性・責任性などの規範概念がある。クリティカルシンキングとポジティブシンキングを融合させながら、サーキュラーエコノミー(循環型経済)を実現することが必要であると考えられる。学習構想を考える際には、SDGs の何を達成することに貢献しているのかを考えると難しくなるが、主体的・対話的で深

い学び、協働的な学びが取り入れられていれば、自然とクリティカルシンキングやポジティブシンキングができる。

単元構想図では、子どもがどんな思いをもつかな、どんな反応をするかな、ということを想定することが必要である。発してほしい発言のほかに、発言できなくても一人一人思ってほしい・持ってほしい言葉も考える。問いは、単元全体を大きく分けて3つ立てるとよい。核となる問い・核を深めるための問い・さらに発展的に考える問いだ。問いの質が重要となるので、言葉やその使い方にもこだわることが子どもたちのより深い学びに繋がっていく。また、協働的な学びを取り入れていくことは学級経営にもつながっていくことが分かった。

赤木 祈乃里　　音楽教育専修4回生

■　自分で考えたこと

ESDは価値観の変容と行動の変革ということは前から意識はしていたが、人の価値観や行動を変えるということはとても難しいように感じていたが、「ナッジ」という形で周囲に仕掛けられた仕掛けに無意識にひっかかって行動を変えられているということに気づくことが出来た。しかし、無意識にしている行動はいつまでも継続されるものであるかはわからないし、良い行動だけでなく悪い行動を促す恐れがあるので、ESDのように意識的に行動を変革できるようにしていくことが重要であると改めて理解することができた。そのESDの行動変革では、何が正しいかという単なる感覚から生じることが多いことから、様々な経験や学習をするなかで、刺激をもらって感覚を研ぎ澄ますことが大事という話もあったが、やはり自分とは異なる他者とのつながり・対話というところが自分にはない視点に気づけるという意味で重要になるのではないかと考えた。

単元構想案作成に向けては、単元構想図を作るという話があったが、こだわって授業をつくりだすと、問いや学習活動が散乱することが多くどのように整理して授業を作っていけばよいか最近は迷うことも多かったので、単元構想図をつくるという作業を通して、もう一度授業づくりの手法を振り返る機会にしたいと思った。

池本 翔真　　教職大学院M1

■　自分で考えたこと

ESDにおいては、理解するというだけでは意味がなく、理解した上で行動に起こすこと、これが大切である。つまり、ESDとは、人々の価値観と行動の変革を促す教育である。人の行動を変えるには、罰を与えて行動させることや、ナッジというその人が意識せずともその行動を取るように促すものが挙げられる。しかし、ESDはそのどちらとも違い、その人が意識して自ら選択して良い行動を起こすことができるようにすることを目的としている。人々の行動する要因には、それが正しいのかという感覚が関係しており、その判断をする力、ソマティック・マーカー装置はすべての動物が持っているものとは別に、人だけが持つ後天的なものもある。何もしなければ、持続可能な社会の創り手に求められるソマティック・マーカー装置は育たない。今回考える単元構想案では、ESDの見方・考え方を意識して、持続可能な社会の創り手に必要なソマティック・マーカー装置を育てられるものを考えていきたいと感じた。

安井 優美　　家庭科教育専修3回生

【第3回】　「優良実践事例のESD分析」

■　概要

今回は、いこま地産地消プロジェクトという、これからの食料生産の分野に関するESDの授業実践の検討を行った。

前半は耕作放棄地についてその問題を自分事として考えて行動していくことができるように畑をやってみたりし、そこでの挫折の後に海ごみとなったプラスチックと向き合う企業と交流し、子どもが内面からやりたいと思える授業を進めていこうとされていた。

その後の交流のなかで、生活基盤があり、ステレオタイプみたいなものができあがっているので、子どもたちのもつ概念崩しが難しいことや、学年目標があるから、統一したアプローチがとれるのではないか、あこがれから見えないところでも行動しようとするようになり、進んで参画するようになるのではないかという話があった。

芝田 椋伍　　社会科教育専修3回生

■　自分で考えたこと

一公立小学校で畑仕事を行ったり、ボランティア活動を行ったり、様々な活動をできるという自由さをしることができ、とても驚いた。また、生徒の自主性についても生徒の意見中心で進めているところから感じることができた。このことを考えると、小学生でこのレベルのことができるなら、中学生、高校生相手だとさらに大きなことができるのではないかと考えた。

また、自分が疑問であった、ESDの単元内容の決め方に関しても実際の例を見ることでヒントを得ることができた。

何もないところから単元の内容を決めることはできないので、自分の地元についてもっと深く知る。どんなSDGsの問題があるのかなど基礎基本のところから調べていきたいと感じた。また、自分の特性(専修が数学なので数学など)を活かしながら、SDGsと絡めていくにはどうしたらよいか、また自分が今までどんなことに疑問をもって生きてきたのかなどの自己理解に関しても発展させていきたいと感じた。

加地 優太　　数学教育専修3回生

■　自分で考えたこと

「誰かのために行動する」という学年目標に沿って見通しを立てているのがとてもいいなと思った。都市化が進み、耕作放棄地は今後どんどん増えていき地球問題にも関わることだと思うので、こうゆう活動は積極的に行っていくべきだなと思った。そして普段、学校に通い授業を受けているだけだと感じれない素敵な体験活動だと思った。給食で何気なく食べている野菜などの食べ物へのありがたみを強く感じることができたり、輸入に頼っている日本が、地産地消として循環していくにはどういう取り組みが必要なのかについて考える時間を設けることは、児童に「社会の一員である」という認識を持たせるのにとても有効的だなと思った。

私も今、栽培実習という授業に参加し、農場でトマトやさつまいも、とうもろこしなどを育てている。こないだ赤いトマトの実がなったので食べてみると、本当に美味しく、暑い中水やりに行った甲斐があったと感じた。なので俵口ファームで収穫が得られなかったというのは、児童が悲しんだと思うので残念だなと感じた。アライグマに先に食べられることや、土が痩せ細っていると耕したり肥料や土を入れ替えたりすることなど、やはり植物を育てる条件が揃っていないと難しいことなので、なんとかこの取り組みが結果につながるように考えていきたいと思った。

山下 恵　　音楽教育専修 4 回生

【第 4 回】　「単元構想案の相互検討」

■　自分で考えたこと

学ぶところまではいいが、行動化につなげるというのがやはりとても難しいと思った。実践の最後に、今後の行動化の一例となるような行動をしめすための活動を行うように構想できればよいと思う。

防災教育はうまくいけば、楽しみながら災害に対する意識を作る学びができると思うため、授業も工夫のしがいがあるのではないかと思う。また、防災教育では、過去の災害や被害について学び、現状の問題や課題を知り、未来を考えた備えや行動に繋げるという時間の意識も重要になってくるのではないかと考える。まとめとして行う活動案として、避難訓練の企画や避難所の運営体験を行うという案が出ていたが、とても面白く、効果がありそうだと思った。特に避難所の運営体験は、実際に災害が起きたときに、積極的に手伝い等の行動ができるようになるかもしれないということを考えると意義のある活動なのではないかと思う。

琵琶湖の水草の問題に関しては、地元の湖も同じような問題を抱えているため親近感がわいた。水草を堆肥にして用いるという話は初めてきいたため、琵琶湖周辺特有の取り組みなのだろうかと疑問に思ったが、水草の処理の方法としては SDGs 的なのではないかと思う。実際に水草堆肥を用いた農業体験ができればよいのではないかと考えた。

勝田 南美　　国語教育専修 3 回生

■　自分で考えたこと

教科書に沿いかながら ESD を取り入れていくのがとても難しいと感じた。野口先生は文法をあまり重視せず、物語の内容を重視していたが、外国語科の授業として、学習指導要領にある外国語の知識・技能を身に着けさせる必要が出てくる。文法を抑えつつ、異文化理解まで授業に盛り込んでいくのがとても難しいと感じた。

村上先生のご提案で「違い」にばかり注目するのではなく、「同じ」にも着目すればよいのではというものがあった、文化の違いも、似ているところも多様性であると考えるため、様々な視点で生徒に文化について考えさせるのが良いと感じた。

ねぶたを主催しているつくば青年会議所の方からお話を直接うかがうことができないため、インターネットで調べて思いを知る活動になったという話を聞いて、本物出会うという ESD のよさを実現させるむずかしさを感じた。単元計画の中で題材にかかわる人々に直接話をうかがうのは、児童生徒にとって実感がわきやすいが、スケジュール調整や話をうかがう人の住んでいる場所などによって実現が難しいことがある。その際、その人が SNS 等に発信している内容に触れたり、オンラインで話を聞いたりすることで学習の方法を工夫できると感じた。自分が作っている単元構想の中にも人と出会う活動があるが、さまざまな形態を模索したい。

吉岡先生のご提案で、「まつりつくばだからこその展開」「吉田先生の味」があれば子どもにとって一生モノの授業になるというものがあった。まつりをテーマにした授業づくりはよくあると思うが、どのまつりでもよいのではなく、その地域の祭りだからこそという授業が作れるようになりたいと感じた。

小南 舞桜　　社会科教育専修３回生

【第７回】　「単元構想案の発表」（学生）

■　自分で考えたこと

先生方からいただいた意見の中には、人権というトピックを扱うのが難しいのではないかというご意見もあった。実際に学級に身体的特徴は女性であっても、性自認は男性だと考えている生徒がいたり、外国人の生徒がいた場合、よりセンシティブになる可能性も考えられるが、そのような学級こそ、このトピックを扱う意味があるのではないかと考えた。その理由としては、彼らが差別を学級内で受けている可能性や今後受ける可能性もあるからである。そのような場合に、このトピックを扱うことによって差別を抑制するきっかけとなったり、生徒がほかの生徒の考えを知り、受け入れるきっかけともなると考えるからである。

発信の方法は元々生徒に考えさせる予定であったが、どのような意見が出てくるのかを自分の中で明確にイメージすることができていなかったが、先生方からいただいた、文化祭での劇、ラジオは有効的なものであると感じた。実際に授業をする際には生徒にどのように発信していくかを考えさせれば良いが、いただいた意見も候補として示すのもよいと思った。

黒柳 新奈　　英語教育専修４回生

■　自分で考えたこと

（自分の単元構想案について）　現時点での構想案だと、ボリュームが大きすぎるのではないかという指摘があった。もともと総合的な学習の時間で行う授業として考えていたため、国語の授業としては確かに活動が多く、内容も濃いものだと思う。提案していただいたこととしては、祭りや神社など地域のことにつなげる部分は無くすか、さっと触れるくらいに留めるようにして、あくまで物語を作る」という国語の活動に重きを置くようにするというものだった。いただいた意見を参考に、８時間におさまる程度のボリュームで指導案を考えてみたい。

（他の学生の単元構想案について）　理科と音楽を融合しようとしている、非常に面白い構想案だった。理科で弦を用いた実験を行うため、確かに理科と音楽を繋げることができるのだと分かり、納得した。しかし、そこからESDへの繋げ方が難しいようだった。グラスハープの活動も非常に面白そうだったため、今後どのように授業が作られていくのか興味が湧いた。

勝田 南美　　国語教育専修３回生

■　自分で考えたこと

今回の単元構想図の検討を通して、これまで自分になかった視点について持つことができた。例えば、自治会活動などから選挙に繋げていくという視点は自分では中々出てこなかったので、このような回りの先生との話のなかでESDの授業はさらに深まっていくのかなと感じた。

また、他の人の単元構想図を検討していくことによって、その人がどのような問題意識をもっているのか、その授業を通してどのような生徒になっていって欲しいと考えているのかが浮かび上がってくる点も興味深いなと考えた。

芝田 椋伍　　社会科教育専修３回生

■　自分で考えたこと

今回は、自分が作成した単元構想案の検討があった。家庭科の授業で、調理実習を行いながら学びを深めていきたいと考えていたため食分野での指導案で検討していた。しかし、地域や家族のためにできることの実践観点で調理実習を行うことで、家族・家庭分野にもすることができると検討を通して教えていただいた。自分がやりたいと思っていた内容で家庭科で学ばなければならない内容を取り込むには家族家庭分野の方が指導案にしやすいと感じたため、修正を行う。

光延 ひなた　　国語教育専修 3 回生

■　自分で考えたこと

今回他の方の単元構想案を見ると、「フードロス（規格外野菜)」「ファストファッションの問題」といった子どもにとっては比較的シンプルで分かりやすい社会問題を取り上げているところが良いと感じた。私の場合は「食料自給率の低下」という大きな抽象的な社会問題を取り上げたため、そのなかに「フードロス（規格外野菜)」や「地産地消が進んでいない」「食料生産者数の減少・高齢化」などの様々な問題を含んでいて複雑になってしまっていると感じたので絞って取り上げる形にしたいと思った。また、私の単元構想案では、私自身が土曜日の早朝に開催されている地元の朝市を取材したことを教材にして地産地消について考える時間があり、感想を頂いた先生方からも実際に地元で開かれているものに自分で足を運んで買った話をするということは大切であるという話もいただき、他の方の指導案でも「実際に調理したり、農家の方へのインタビュー」「制服工場に見学」などの人に出合わせたり、どこかに足を運ぶということをしているのが良いと感じたので、地元の朝市を中心に単元構想を練り直していきたいと考えた。

池本 翔真　　教職大学院 M1

■　自分で考えたこと

一番に感じたのは、私の単元構想案は他の学生より大きく劣っているということである。主にこれは SDGs に対する知識、教育の場に立った経験の違いだと考えた。そのことにより、何が変わっていたかというと、私は単元の流れが自然かどうかに差があると感じた。私の今の単元構想案では生徒が教員に引っ張られている部分が多々あり、生徒の自主性の尊重が行われていないと感じた。そのことを改善するために、生徒の立場から物事を考え、どのような疑問がわくのかなどしっかり詰めていきたいと考えた。

ふぞろい野菜がもったいないというのだけでなく売られない悪い仕組みに一歩踏み込むことで中学生のレベルまであげることができるのではないかと他の教員からアドバイスしていただきました。このことを踏まえて、自分のしたいことととうまく混ぜ合わせより自分の単元構想案を発展させていき、指導案作成を行っていきたいと考えた。

加地 優太　　数学教育専修 3 回生

【第 8 回】　「学習指導案の検討」

■　自分で考えたこと

（万博と共生）　万博と ESD 自体は親和性の高いものであると思うが、実際に授業に落とし込むとこのような形になるのだと、一つの方法を見ることができて参考になった。

「共生」という一見難しそうなテーマでも、地域の企業との交流やシカとの共生という身近な問題を取り上げることで、考えを持ち深める余地が十分に作られていて非常に面白い授業案だと思った。

（日本画と奈良）　環状の構想案が非常に見やすい上に分かりやすく、機会があれば参加にしようと思った。学習の流れの中で地域の人々と関わる機会が自然に作られていて、自分の住む地域への目の向け方もスムーズで循環性の高い授業計画だと感じた。次の学年の学習へ繋げることも考えられていたため、総合的な学習の強みが活かされていると思った。

（備蓄米）　単純に米作りを通して米について考えたり知識を深めたりする従来の学習方法とはまた違う視点から米について考えられるところが新鮮で、時代にあっていると思った。

想定では、備蓄米の方が新米よりも美味しくないと言う反応を得られるはずだったが備蓄米の方が美味しいという反応の方が多かったというところに実践の難しさと面白さを感じた。

勝田 南美　　国語教育専修 3 回生

【第 10 回】　「学習指導案の検討」

■　自分で考えたこと

自分の学習指導案の発表においては、４ページ程度に収めるために削った部分が多く、発表の際に付け加えて説明をする必要があったので、学習指導案を見ただけで何をするのかがわかるくらい詳細を書く必要があると感じた。総合の時間と英語科、中学校までの道徳科との連携を図っているが、それがわかりにくい部分があるかもしれないと感じた。人権、いじめ、差別、偏見といった扱いにくい題材で授業をするため、生徒への関わり方や発問方法などを意識して作成する必要があると感じた。全体的に自分の中で持っている考えなどを上手く言語化することが難しいと感じるため、再度学習指導案を見直して他者に伝わりやすい文章にする必要があると感じた。

質疑応答の時間に、実際に私が受けたいじめや差別がどのようなものであったのか興味を持った方がいたので、授業の導入として私の体験を説明することによって生徒が差別やいじめを自分事化し、身の回りにあるものだとより一層認識できるのではないかと考えた。また教師がいじめや差別を受けたことがあると発言することによって、本題材の扱いにくさを少し和らげることができるのではないかと考えた。また外国の話やＬＧＢＴＱの話に進む前に、生徒自身が持っている偏見について考えさせることでより本題材を身近なものに感じることができると考える。具体的には外国の話をする前に身の回りの偏見、例えば眼鏡をかけている人は頭が良い、髪の毛が短い女子は大雑把などの例を示し、身近なことから考えさせることも必要になってくると感じた。授業を通して実際にいじめを経験した人や差別を受けた人は傷つく可能性があるので、その問題についてどのように問題が発生しないように気を付けるべきかを考えて授業をすることが求められると感じた。

黒柳 新奈　　英語教育専修 4 回生

■　自分で考えたこと

自分の指導案に関して担当の先生とかなり詰めたと感じていたのですが、自分の知らない知識や、知らない考え方をたくさんいただいてまだまだ勉強不足だということを痛感した。今すぐどうしようもできないことではあるが、やはりいろんな人から話を聞いたり、体験している大人だ

から自分を超えてきているのだなと感じた。このことから自分の知らない世界をしることができるゲストティーチャーというのはとても大事なのだなと身に染みて感じることができた。

前回発展させたいことで書いていた、ふぞろい野菜を完全に売れていない悪い仕組みに目を向けさせることからさらに今回、その悪い仕組みになったのは自分たちがそのようにして選んでいたからだと感じさせるという自分の中で分かってはいたが言語化されていなかった言葉をいただいた。そのことについてしっかり発展させて最終的な指導案の完成を目指していきたいと感じた。

加地 優太　　数学教育専修 3 回生

■　自分で考えたこと

今回の検討を通して、やはりこの授業の課題の一つとして、どのように教師がフラットな目線から授業を作成することができるかということがあるなと感じた。今回の授業を通して身に付けて欲しい能力として、様々な意見に対して、否定するのではなく相手の意見も聞きながら自身の考えを根拠をもって形成していくことができるようにしようとしているが、多様な意見が生まれるように模擬選挙の候補を作成できるかどうかが、この授業のポイントになるなと感じた。

また、今回も他の先生方の発表を踏まえて、それぞれの視点や経験が生かされた授業が ESD の授業では行われているなと感じることができた。今回の私の授業は、奈良市のような比較的都市部での実施を考えているが、例えばもし私が奈良県南部など、比較的山間地域にあり、市議会や町議会選挙が無投票となる地域である場合に、今回の授業はどのように計画を組み替えていく(もしくはそこでの経験を生かしてどのように授業が変わるのか)かということについて、検討していってみたいと思う。

芝田 椋伍　　社会科教育専修 3 回生

■　自分で考えたこと

今回の発表を通して、改めて授業の軸を明確にすることの重要性を実感した。また、導入での「鐘の音なんかいいなぁ」という子どもの素朴な感情を大切にすることが重要だという指摘は、とても印象に残った。ESD というと大きな理念や社会課題に目が向きがちであるが、出発点は子どもの感情や気付きであるべきだと感じた。

さらに、「鐘には光と影がある」という視点は、単元全体を整理する大きなヒントになった。平和を祈る鐘という光の側面と、戦争や悲しみと結びついた影の側面。その両面を音楽を通して感じ取ることができれば、子どもたちの理解はより深まるのではないかと考えた。

日本の鐘については、まだ自分自身の学びが十分とは言えないため、教材研究をさらに深めたい。また、ゲストティーチャーの活用も視野に入れ、より多角的な視点から学習を構成していきたい。

金谷 双葉　　大学院教科教育専攻（音楽）M2

■　自分で考えたこと

鹿児島の高校先生はお米の発表をされていました。私の中で、お米は東北らへんで作られているものだと思っていたので、鹿児島で育つんだと思いました。毎日食べているものであり、消費者でありますが、自分で作ることによって生産者の苦労を実際に体感することができる、という話が出ていて、とても心に感じました。私も田んぼでお米を育てる経験が人生で２回あります

が、中々大変でした。そのお米を自分で食べるのも、とても美味しいと思うし、何より感謝の心を育むことができるのでいいなと思いました。

山形の先生は全13時間のかなり濃密に考えられた授業だなと思いました。生徒会活動や体育祭って絶対行うものですよね。その中に少しESDを絡めたりするのは学習が深まりそうだなと思いました。私の高校では、職業について考える時間なんてなかった気がします。大学進学ばっかりの進路相談で、何になりたいのか、自分の適性にあっているのは何なのだろう、と自分を見つめ直す時間は高校の授業であった方がいいなと発表を聞いて思いました。

自分の発表は、緊張して語尾がおかしくなったりもしましたが、担当の原田先生にフォローして頂いたり、周りの先生も暖かく聞いて頂きました。そんな中で、音楽と理科どっちに重点を置いているのかや、総合で出すかべきか、一番悩みどころです。そしてチーム内がたまたま理科の先生が多かったので、他にもこうゆうのあるよと教えて頂いたりもしました。その中でゴミを回収して楽器を作って演奏する、なども面白そうな案も頂き、話がとても楽しかったです。

私はまだこの授業を実際に行えていない、というのが、ネックです。児童の反応を見れていないので、なんとも言えない部分があるというか。もう少し練っていいものができたらな思っています。

山下 恵　　音楽教育専修4回生

【第11回】　「研修の振り返り」

■　概要

ESDは3つの流れからできている。それは環境教育（公害教育、環境倫理教育、自然体験・野外活動）、開発教育（途上国理解や支援、開発ゲーム）、人権・平和教育（反原爆・反戦教育、同和教育、在日韓国・朝鮮人）である。学ぶだけでなく、行動化を促すことが目的である。

環境問題への意識の高まりは国連人間環境会議で「環境教育」概念の定期によって始まる。その後のブルントラント委員会でこれからの開発は「持続可能な開発でなければならない」とされ、世代間の公正と世代内の公正を意識することが大切だと言われた。また地球サミットで気候変動枠組み条約や生物多様性条約を結んだ。

2000年から2015年には人間開発への方向転換が起こり、ミレニアム開発目標が採択された。またSDGsの採択では、途上国や小国、女性が中心となって物事を決めた。SDGsの目標はウェルビーイングの向上、経済成長、自然環境の保全・回復が軸になっているが、環境課題への目標は多くない。ESG投資の加速化により、物流部門も含めたSDGsバリューチェーンの着目が起こっている。そして消費者もSDGsの認識が高まったり、SDGsに関する商品への興味の向上という傾向があることを学んだ。

黒柳 新奈　　英語教育専修4回生

■　自分で考えたこと

「ネイチャーポジティブ」という言葉自体は1年ほど前から、その考え方についてはその少し前くらいからよく耳にするようになったが、自然を保護するという現状維持にとどまらない再生をするということで大切なことであると感じる一方で、そのような言葉にかわるということは、

SDGs が打ち出され、取り組みが進んでいるはずなのに、自然が失われているということであると少し危機感を感じた。この危機感がどのくらいの人に伝わっているのかというのは気になった。

今回の中澤先生の話とそのあとの協議でも企業について話題に上がったが、スーパーにいっても環境に配慮した製品も増えていて、消費者が購買行動をする際に環境を守る行動をするのかということを明確に選択肢として示されるようになってきていて、企業は消費者のニーズに環境配慮ということがあるとある意味信じて取り組みをかなり進めているのだと思うので、次は消費者の番だと感じたので、そのためにも ESD の推進が大切であると改めて感じた。また、環境・経済・社会のバランスが大事ということはこのようなところにつながってくるのではないかと考えた。

池本 翔真　　教職大学院 M1

あとがき

ESD の取組に参加して

私が ESD の取り組みに参加して気づいたことは、繋げる、繋がることの大切さだ。ESD の取り組みは、1 つのことに対して長期的に、そして多くの人の手によって作られているということを実感している。加えて、私は、ある人たちが持っている問題・課題意識を様々な形で表現し、それがまた新たな人の問題・課題意識へと繋がっていく活動を ESD だと考える。その上で、たくさん手間暇かけて多くの人で作り上げたはずの企画を 1 回きりのものとして終わらせてはもったいない。その企画を土台として、次の企画へ繋ぎ、そして参加者それぞれがまた新しく、そして強固に繋がりをもって活動することが ESD を拡げていくことにおいて重要だと考えるからだ。

次年度は、より多くの ESD 実践に触れ、ESD の表現方法を体験したり知っていくことを心がけたい。ESD は実践が大切であるということについて学んだ上で、何か自分にできる企画はないか、ユネスコクラブでやりたい活動はないか考えた時、自分の知識不足によってアイデアが思いつきにくく、それに対して強いもどかしさを感じたためだ。このことから、私は報告会並びに現在行われている ESD 実践に、より触れていきたい。

玉井 綾音　　国語科教育専修 2 回生

これからの ESD 活動に向けて

今年度の取組を踏まえて、次年度は、さらに自信を持ってさまざまな活動に参加できるよう自身の知識を深めること、またこれまで以上に多様な活動に参加することをがんばりたい。前年度、私が参加する活動に偏りがあることに気づき、今年度はこれまで参加していなかった活動にも意識的に参加するようにした。その中で、万博でのワークショップや国際シンポジウムへの参加は、私の興味を広げるとともに、新しい知識や視点を得る良い機会となった。また、新たなことを学ぶ楽しさにも気づくことができた。

ESD を多面的に捉え、さまざまな視点から考えられるようになるためにも、今後は知識をさらに深めながら、より多様な活動に参加していきたい。

木村 結衣里　　英語科教育専修 2 回生

大学での学びと ESD の取組

ESD 活動において大学で学んだことは単なる知識として機能するだけではなく、物事の見方を広げる力として生かされていると感じる。複雑性がある ESD に関する問題に取り組み、解決するためには、それらを多面的・多角的に捉える視点が重要になる。確かに教科に関する専門的知識も大切ではあるが、自分の興味関心から問いを立てて課題、仮説を導く力や、考えるという点においてのメタ認知やクリティカルシンキングといったものは物事を探究的に考え、持続可能な学びをしていく上で基盤的な重要性を持っていると私は考える。また、持続可能な社会をつくるためには、1 人の知識だけで解決するのではなく、多様な人々の考えを尊重しながら対話し、課題に向き合う必要がある。こういった大学で学んでいる考え方や姿勢は、ESD の活動を進める上で大きな基盤となっている。

相馬 心　　数学科教育専修 1 回生

令和７年度

奈良教育大学　ESD ティーチャープログラム　学生活動報告書

令和８年３月31日

国立大学法人奈良国立大学機構奈良教育大学 ESD･SDGs センター
〒630-8528 奈良市高畑町
Tel 0742-27-9367　Fax 0742-27-9147（教育研究支援課）